

追悼特集

公益社団法人日本写真家協会名誉会長

田沼武能氏を偲ぶ

令和4（2022）年6月1日 永眠 享年94（没年93歳）

田沼武能氏は、長きにわたって日本写真家協会会長を務められ、当協会のみならず写真界を牽引していただきました。生涯現役を貫き、写真文化の発展と写真家の権利の向上に尽力し、計り知れない貢献をされ、2019年に写真家として初の文化勲章を受章し大きな足跡を残されました。

今号では、故人ゆかりの関係者、関係団体からのご寄稿を掲載し、故人に対しての感謝と哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈りしたいと思います。（執筆者50音順掲載）



田沼武能

（撮影・伊勢丹写真室）

【関係者からの寄稿】



田沼武能先生を偲んで

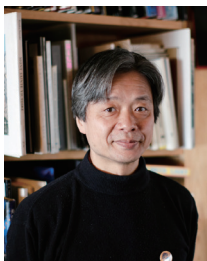
凸版印刷株式会社

特別相談役 足立直樹

田沼先生とは2009年に日本写真家協会の理事をお受けしてからの付き合いですが、なぜかとても気が合い、様々な会での発起人も仰せつかるなど、思い出は尽きません。協会での先生は、議長として会議を効率的に進められながら、幅広いご経験からの興味深い逸話をお話くださり、私はいつも楽しみに出席していました。先生の文化勲章を祝う会では、参加者誰もが先生を尊敬し、祝意を直接伝えたいという思いが溢れた素晴らしい会となったことが懐かしく思い出されます。デジタル化により大きく変化する写真界ですが、先生が今も見守ってくださることを信じ、写真家の皆さまを支える力となるべく尽力してまいります。田沼先生から頂戴いたしました温かなご懇情に心からの感謝をささげます。



2021年5月の定時総会にて



田沼武能さんを偲ぶ

写真評論家 飯沢耕太郎

編集・執筆した『日本の写真作家29 田沼武能』（岩波書店、1998年）の刊行に際して、田沼武能さんご本人とその作品とに親しく接する機会を得た。それ以来、日本写真家協会の活動を通じて、審査や展覧会の構成などでお付き合いすることが多くなった。むろん、田沼さんの写真家としての長いキャリアを考えれば、ごく限られた時期という

ことになるのだが、それでも20年以上の時間が経過している。その間、いつも強く感じていたのは、本当にポジティブな方だということだ。日本写真家協会、日本写真著作権協会の会長職など、田沼さんは写真界の要というべき立場にあり続けていた。写真家たちには、個性的というか、どちらかといえばエゴイスティックな性向を持つ人が多い。田沼さんはそのことを承知の上で、彼らの存在を否定することなく上手にコントロールし、物事を先に進めていくことができる稀有な能力の持ち主だった。もし田沼さんがいなければ、デジタル化、大震災、コロナ禍といった大波の中で、日本の写真界が方向性を失って四分五裂しまうことも十分に考えられたのではないだろうか。

そのポジティブな志向は、田沼さんご自身の写真にもよく表れている。田沼さんが1966年にタイム・ライフ社の契約写真家になった時、ベトナム戦争の取材を拒否したという話を聞いたことがある。東京の下町出身の彼は、多くの死者を出した東京大空襲の記憶を忘れることができなかったのだ。逆に「世界の子どもたち」というライフワークは、その体験があったからこそ成立した。苦難の中でも明るさを失わない子どもたちへの想いは、最後まで変わらなかったのではないだろうか。



「木村のスパイか？」

公益財団法人 さかた文化財団 酒

田市土門拳記念館 館長 池田真魚

田沼先生が、秋田で開催中の木村伊兵衛展に向かわれる途中、土門拳記念館にお立ち寄りいただいたのが今年1月のことでした。相変わらず年齢を感じさせないお姿やお話でしたので、訃報は寝耳に水でした。

木村伊兵衛と土門拳が日本写真界を牽引していた頃、木村伊兵衛に師事されていた田沼先生が土門の自宅を訪問した際、「木村のスパイか？」と勘違いされ

たというエピソードは、田沼先生が折に触れ笑いながら語られておりました。

土門拳記念館では、2019年に『特別展 昭和を見つめる目 田沼武能と土門拳』を開催いたしました。イベントとして当館の藤森武理事が聞き手を務め、『田沼武能「昭和と東京を語る」』と題し、お話をいただいたときも、前述のエピソードで笑いを誘いながら、2人の巨匠から引き継いだ写真魂を語られていました。まだコロナウイルスの名前も知らなかった3年前のこと。生きた昭和を感じさせる熱い空気が会場に満ち満ちていました。

田沼先生には、当館30周年記念誌に日本写真家協会会長としてメッセージもいただいています。本格的な個人写真美術館の誕生は、大きな喜びであったこと、今後も日本の文化、写真文化の振興に貢献してほしい、そういった内容でございました。先生のご期待に添えるよう、また、国内初の写真美術館の名に恥じぬよう、今後も研鑽してまいります。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。



佐伯義勝氏と新年の挨拶に土門氏を訪問の一コマ。1974年、田沼武能撮影



自分の体よりカメラを守った田沼さん

朝日新聞出版 社長 市村友一

弊社が1926年から2020年まで刊行してきた『アサヒカメラ』を長年にわたり、そして最後まで支えてくださったのが、田沼さんでした。同誌にはカメラやレンズの新製品を分解までして徹底的にレビューする「ニューフェース診断室」という名物連載がありましたが、田沼さんは師匠である木村伊兵衛さんが亡くなった後を引き継ぎ、休刊の号までの確な批評を執筆してくださいました。最新カメラのテストに意欲的で、デジタル時代になっても常に新技術や操作方法に関心を寄せ、しっかりと会得されていました。

2016年、田沼さんが87歳のとき、ご自宅の階段を滑り落ちて腰椎を圧迫骨折されたことがありました。弊社関係者によると、田沼さんはそのとき、「ニューフェース診断室」のテストのため持ち帰った新製品のカメラを手にしていました。階段でバランスを崩した際、カメラを落とさないよう無理な姿勢を取ったため、転落してしまい、「自分の体よりカメラを守った」と、後で笑っておられたそうです。

骨折による入院は1か月以上に及び、その間に全日写真主催の写真コンテストの審査がありました。全日写真会長だった田沼さんは「審査はやる」ときっぱり。

病院から車いすに乗って会場に來られました。長い

入院で最初は顔色も悪かったのですが、写真を見始めたたん、背筋が伸び、目を輝かせて2千点以上にのぼる写真審査を進めたとのこと。その話を聞き、「本当に写真とカメラを愛する方なんだなあ」と深く感じいった次第です。



田沼武能氏を偲んで

東京都写真美術館

館長 伊東信一郎

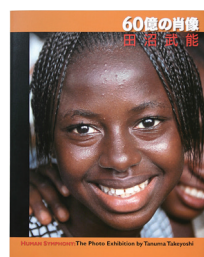
世界の子どもや下町の風景、自身のふるさとである武蔵野など、長年にわたり記録し続けてきた田沼武能氏が今年6月1日、93歳で逝去された。東京都写真

美術館と田沼氏との関わりは長く、今年で開館27周年を迎える当館の設立時からの収蔵作家であり、2004年には氏の個展「60億の肖像」を開催した。

この展覧会は、当時ですでに120を超える国と地域を精力的に取材してきた田沼氏の半世紀にも及ぶ活動の軌跡を辿る展覧会で、初期の代表作である〈文士・芸術家の肖像〉をはじめ、〈戦後の子どもたち〉や世界各地を取材した〈人間万歳〉〈地球っこたちは今〉にいたるまでの代表作約200点が一堂に会し、ヒューマニスティックな視点で人間ドラマを撮り続けてきた田沼氏の写真世界を展望することができた。そして、写真家として3人目の文化功労者に輝いた数か月後に開催された展覧会は話題を呼び、32日間の会期中に2万7千人を超える来場者があったことは大変喜ばしいことであった。

田沼氏は国内外で精力的な取材活動を展開し、ほぼ毎年展覧会で自身の作品を発表し続け、その旺盛な好奇心と行動力は生涯衰えることはなかった。その一方で、母校・東京工芸大学では後進の指導にあたり、日本写真家協会会長、日本写真保存センター代表など写真界の要職を歴任しながら、わが国の写真文化の普及啓発、さらには写真の著作権保護にも力を注いでくださり、当館の展覧会には必ずといっていいほど足を運んでくださったことに、深く感謝を申し上げたい。

写真家として、生涯第一線で活躍してきた田沼氏を支えてきたものは「人間」へのあくなき興味と、同時代に生きる人びとが織りなす様ざまなドラマを写真に記録し、未来へと伝える喜びにほかならないだろう。田沼氏が遺した人間ドラマの数かずが今後も多くの人びとを魅了し続けることを強く願っている。



50億の肖像 田沼武能
写真集図録 2004年
デザイン：柴永事務所
(柴永文夫・中村竜太郎)



「ベランメエ」の視点と著作権
一般社団法人 日本美術家連盟
常任理事、画家 入江 観

田沼さんの名前も作品も、ずいぶん前から目にしていたが、直接の知己を得るようになったのは、APG－日本美術著作権機構の会議で御一緒するようになってからである。

そもそも私たち美術家にとって「著作権」なるものは、その重要性は理解しつつも容易に馴染み難い代物であった。しかし、当時美術家であって没後 50 年認められていた著作権が、どういう理由でか写真家には認められておらず、その不公正の問題に取り組むことで、写真家の皆さんは否応なく「著作権」と直面せざるを得なかったのだと思われる。

権利回復の戦いを経験することによって写真家の著作権意識は美術家のそれより遥かに高く、私たちは教えられることも多く、著作権に精通した瀬尾太一さんの爆弾トークも懐かしく思い出されるが、時折発言される田沼さんの、やや、ベランメエ口調が、ともすれば、硬く冷たい法律としての著作権を私たちの日常に近づけてくれたことは間違いない。

以前、田沼さんから何冊か作品集を贈っていただいたが、それらを見返しながら不思議に思うことは、写真家のレンズの向うにあるのは常に、あられもない現実でしかないのに、出来上がった写真に、優しさと品位が漂っていることである。ベランメエの視点の中に田沼さんのヒューマニズムと師匠、木村伊兵衛から受継いだものがあるのかと思う。



平和が一番
日本自然科学写真協会
会長 海野和男

あんなにお元気だった田沼武能先生、我われ写真家に希望を与え続けて来られた先生、2020 年の文化勲章受章記念の会でお会いしたのが最後だった。あの

会はとても心に残る会だった。コロナ騒ぎの直前で、本当に良かったと思う。大学のクラブの後輩が（写真クラブではなく昆虫研究会）田沼先生の甥っ子だったせいもあり、学生時代に自然関係の写真家以外で、初めて身近に感じた写真家だった。

写真界での功績は素晴らしい。江戸っ子で短気だそうだが、温厚な人柄で争いとは無縁の方だった。日本写真家協会の会長を長く務められ、うまくまとめたのは、先生の人柄故であると思う。ばくのような下っ端の写真展や出版記念会にも、いつも顔を出して下さった。審査でご一緒したり、その後の懇親会で

も、親しくしていただいたりと、付き合いは長かった。審査では独特の写真観があつて、最後に、でもね、これいいよねといわれれば、皆が従うようなところもあった。

平和が大切であるということを、いつもいわれていたように思う。だいたい前には車は何に乗っていると聞かれ、ジープと答えたら、あれはアメリカの軍用車だといわれたこともあった。今、世界は分断されているが、戦争を体験され平和が一番と思っている先生の訃報に接し、戦後の平和な時代はもう終わりなのかと、悲しい思いに駆られるのである。

田沼先生、天国から我われ写真家をそして世界を見守って頂きたいと思う。田沼先生のご冥福を心より祈念して、追悼の文を締めくりたいと思う。



ゆっくり私たちを見守ってください
朝日新聞社 ネットワーク報道本部
部員兼映像報道部員 勝又ひろし

私は編集長、副編集長として計 10 年間『アサヒカメラ』に在籍し、田沼さんとは毎月顔を合わせていましたが、それよりも全日本写真連盟で 7 年間、連

盟会長としての田沼さんと築いた関係のほうがはるかに濃密でした。アマチュア写真界でも多くのファンを引きつけていました。コンテスト審査も真剣勝負、請われれば遠くの写真展にも出かけ、気さくに語り合い、礼も欠かさない。訃報が流れると SNS には「田沼さんに写真展にきてもらった」「ツーショットを撮らしてもらった」「記念写真を送ってくれた」などの死を悼む声があふれました。

田沼さんと話す機会が多く、繰り返しも多かったのですが（笑い）、多くの興味深いことを聞かせてもらいました。7 月 16 日の朝日新聞夕刊の惜別記事でも触れましたが、昨

今の写真界の状況に危機感を持っていました。これが大きな心残りになっていると思いますが、もうひとつ心配だったのは、後継者のことだったと思います。

JPS のような芸術系職能団体は、会社と違って組織のトップを目指そうという人はあまりいないと思います。田沼さんも好んで長期に会長を務めたわけではないでしょう。後継者と目していた菅洋志さんに先立たれたのは痛恨だったと思います。また「役所や政治家としっかりパイプを作っておかないといけない」と常づね仰っていて、そのために抜擢した瀬尾太一さんが昨年 60 歳で逝ったことも、大きなショックだった違いありません。

93 年の人生でこれだけ行く末を見届けたいものが



銀座でばったり師匠の木村伊兵衛と遭遇 1973 年

残っているとは、どれだけ最後まで現役だったのかと思います。もうゆっくり伊兵衛さんと師弟談義でもしながら、私たちを見守っててください。



田沼武能先生を偲んで
日本風景写真協会

会長代行 川隅 功

田沼先生の悲報は余りに唐突でテレビのニュース番組で知りました。約一か月前、日本写真著作権協会のオンラインによる理事会で、お元気なお姿を拝見していたのに…。帰らぬ人に…。直ぐには信じることができませんでした。それも6月1日の写真の日に…。写真の日に天国に旅立ちされました。

田沼先生とは、1993年11月に開催された某カメラ雑誌社のパーティー会場で初めてお会いしました。私はまだアマチュアの間際でしたので、緊張のあまり先生とは名刺交換と軽いご挨拶で終わってしまいました。それから数年後、JPS入会後は、お会いする度にお声をかけていただき、「川隅さんはいつ大きい写真展とパーティーするの？私が挨拶するから早くしてくれない？」と仰っていただきましたが、それも叶わないままに、先生は旅立っていかれました。今になっては大変残念で大変心残りです。

先生とは、ここ数年間、日本写真著作権協会の理事会で一緒にさせていただいておりましたが、ある理事会の時、集合写真を撮ろうということになりました。その時どなたかカメラをお持ちですか？に、写真家の会合なのに、田沼会長しかカメラをお持ちではなく、会長のカメラで記念写真を撮影したことを覚えています。

いつも気さくに接していただき、時にはユーモアがあつて、パワフルにお仕事をされ、生涯現役を貫き通した真の写真家田沼武能先生、これまでの導きに心より感謝し、安らかに眠りにつかれることをお祈りいたします。



田沼先生を偲んで
公益社団法人 日本複製権センター
代表理事 川瀬 真

田沼先生の写真家としてのご功績はいうまでもありませんが、私は長年著作権行政に携わってきましたので、写真家の著作権保護という視点から、田沼先生のご功績を皆様にお伝えしたいと思います。

写真の著作権は旧法時代原則発行後13年でした。現行法の制定の際（1970年）に保護期間が見直されて原則公表後50年になりました。しかし、その際写真以外の著作物は著作者の死後50年まで延長されま

した。写真については、様々な経緯から、他の著作物と比べて短い保護期間になっていましたが、写真家の皆さんは田沼先生を筆頭に法改正運動を展開され、1996年の著作権法改正で、写真家の悲願であった著作者の死後50年（現在は死後70年）を勝ち取られました。また、保護期間については、法的安定性の確保のため、法改正により長い保護期間を与えられたとしても、改正の時点で著作権が消滅しているものは、保護が復活しないことになっています。実は田沼先生の作品も1957年までに発行された作品は保護がありません。この問題は法改正には至りませんでした。田沼先生は関係者に法改正を訴え続けられていました。

このように田沼先生は、写真の権利保護の拡大について、写真家の地位向上という一念で大変熱心に取り組んでおられました。そのご功績は計り知れないものがあると思います。私のような若輩者に対しても、気さくに接していただいた田沼先生の笑顔を今でも思い出します。田沼先生のご冥福を心からお祈りします。



田沼先生を偲んで
株式会社ニコン

特別顧問 木村眞琴

ご逝去の知らせに接し、いつもお元気で過ごしのことと思っておりましただけに本当に残念でなりません。

日本写真家協会の会長として長年にわたり著作権、写真保存等の課題に取り組みそして写真家協会を一つにまとめ上げていくことに力を尽くされ、写真家として初めて文化勲章を受章され、まさに偉大な写真家であると同時に会長として大きな功績を残された方でもありました。

先生のことでまず思い出すのは何時も熱情溢れる語り口でいろいろな話をされることです。お会いする度に今日はどんなお話が伺えるかと楽しみにしておりました。先生の作品といえば子ども達の写真が有名ですが、私にとっては何故かカタルニアの写真集、その中でも古い教会、修道院の写真が印象に残っています。

またある時、田沼先生が怪我で入院されたという話を聞いて大変だと早速お見舞いに伺ったところ、至ってお元気で逆に私どもの写真を撮っていただいたこともありました。私はメーカーとしてのお付き合いが主でしたが、本当に魅力的な方で話に説得力があり、かなり前に文化財の保護という観点から日本写真保存センターの立ち上げに協力を依頼された時も田沼先生の熱い想いに動かされ賛同いたしました。

写真に関して熱い気持ちをお持ちで笑顔の素敵な方でした。笑いながら我われ皆を温かく見守っていて下さると思っています。心よりご冥福をお祈り申し上げます。



撮影：下村一喜

田沼先生へ

女優・ユニセフ親善大使

黒柳徹子

田沼先生は、子どもを撮ったら世界一というくらい、子どもの写真を上手にお撮りになりました。私がユニセフの親善大使になった時、田沼先生から直ぐに、私の視察に同行したいと連絡がありました。行ったことのない国に行つて、子どもを撮りたいということでした。

私は、NHKでデビューした頃からなぜか田沼先生に写真を撮っていただくことが多く、気心が知れていました。それから、ユニセフ親善大使になって38年間、必ず一緒に、自費で、視察に来てくださいました。

私は、視察から日本に帰って来て田沼先生の写真を見て、「ああ子ども達は、こんな風に私に手を出していたのか」とか「飢えた子ども達の目はこんな風に乾いているのか」と解るのです。

この1～2年はコロナで行けませんでしたが。でも今年は行けるでしょうと、秋頃に、ユニセフの視察に行く約束をしていました。いつも、私が決めるより先に、「ねえ、今年はどこ？決まった？」と連絡をくださるのです。田沼先生は、93歳でした。「そうか、93歳でも子ども達のところに行こうとなさっていたのか!!」私は、改めて感動したのです。いつも、カメラを3つも首にぶら下げて、暑い中、子ども達に声を掛けながら撮っていたお姿が目につきます。

田沼先生ありがとうございました。子ども達は、生き生きと田沼さんの写真の中で生きていきます。

1984年から、同行して下さった国ぐにです。

タンザニア、ニジェール、インド、モザンビーク、ベトナム、カンボジア、アンゴラ、バングラデシュ、イラク、エチオピア、スーダン、ルワンダ、旧ザイール、ハイチ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア、モリタニア、ウガンダ、コソボ、アルバニア、マケドニア、リベリア、アフガニスタン、アフガニスタン（2回目）、ソマリア、シエラレオネ、コンゴ共和国、インドネシア、コートジボワール、アンゴラ（2回目）、カンボジア（2回目）、ネパール、ハイチ（2回目）、女川町、山元町、亶理町、南スーダン、フィリピン、ネパール（2回目）ミャンマー、レバノン。

田沼先生を偲んで

一般財団法人 日本カメラ財団

理事長 櫻井龍子

お亡くなりになる一週間前、JCII ビルにお立ち寄りになった田沼先生は、「さようなら。」とって笑顔で手を振りながら帰

って行かれました。最後のお別れにいらしていただいたように思えてなりません。

令和元年、JCIIの理事長職を森山眞弓から受け継いだ際、「写真のことは田沼先生に相談することね。」といわれ、理事長就任のごあいさつを兼ねて先生を訪ねました。温かい笑顔で迎えてくれた先生は、「森山さんの後は大変だねえ。」とお気遣いいただきながらも、「森山さんは写真が大好きだったので、櫻井さんも写真を楽しむといいですよ。」とアドバイスを下さりました。先生のいうとおり、あれからずっと教室に通い写真を勉強しております。

田沼先生のことは森山前理事長から常に聞かされておりました。平和を願う視線で世界中の子ども達を撮り続けたこと、写真展には必ず顔を出して挨拶して下さること、日本写真家協会の会長を20年お務めになったこと、その功績は限りがありません。中でもとりわけ、日本写真保存センターの設立に奔走していたことを森山前理事長が熱く語っていたのは非常に印象的でした。写真界が一致団結し、先人が残した日本人社会の記録、写真芸術としての作品など貴重な文化遺産を守り、それを活用していくという使命を2人が共有していたのはいうまでもありません。少しだけ早く旅立った森山眞弓前理事長と今ごろあちらの世界で写真談議に花を咲かせていることでしょうか。謹んでご冥福をお祈りいたします。



2006年、日本写真保存センター設立推進連盟発足の記者発表会での田沼氏と森山前理事長



巨星墜つ

公益社団法人 日本広告写真家協会

会長 白鳥真太郎

あの田沼さんが突然ご逝去された。私達が憧れ、その写真家人生を私達も同じように送りたいと思っていた田沼さんだった。私と田沼さんの初めてのお

付き合いは、今から17年前である。広告写真一筋で他ジャンルの写真家との交流の無かった私に「日本写真家協会にも入会して下さい」とのお誘いを受け、その折に初めてお目にかかったのであるが、JPSの新入会員となった私に、優しく語りかけて下さったことも忘れられない。その後、日本写真家協会、日本写真文化協会、日本広告写真家協会の3団体で年に数回の親睦会を開催するようになったが、そんな時にもいつも柔かな言葉で接していただいた。

しかし、あるパーティーでびっくりしたことがあった。沢山の群衆がいた広い会場のためか、田沼さんがスピーチに立った時、一向にザワツギが止まらなかった。

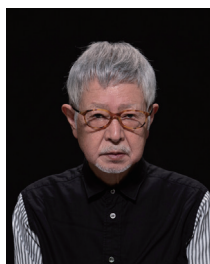


「静かにしろ！」田沼さんが激高した。穏やかな田沼さんの中の一本気を見た気がした。そして嬉しかった。

田沼さんはいつも重いカバンを肩に掛け、何かを見つけるとさっとカメラを出し、素早くシャッターを切る。軽快なフットワークとエネルギーあふれる写真家魂をもう見られなくのがすごく寂しく感じる。たくさんの写真集も残され、それらがこれからも永遠に私達を楽しませてくれるとはいえないが、これまでも私達の先を行き、写真家の立場を文化勲章受章者として高めて下さった田沼さんに心から感謝をしたいと思う。ご冥福をお祈り申し上げます。合掌



写真審査「国際写真サロン」で休憩中の田沼さんを撮影する安珠さん 2017年11月、白鳥撮影



江戸っ子気質

日本肖像写真家協会

会長 杉山 薫

お忙しい田沼先生が、私共日本肖像写真家協会東京大会にご出席していただいたことがあります。スピーチでも、個ことの雑談でも、人情味溢れて心に響く江戸弁調で話されていたことが印象的でした。また、各写真協会の目的は違っていても写真の人は皆「仲間」といわれていた時も、先生の江戸っ子気質な所を感じました。数多くの画集の作品も天衣無縫とでもいいますか、田沼先生の一貫性が伺えるように思います。写真家として初の文化勲章受章は、写真界で活躍している私達にも自信と励みになりました。

その受賞パーティーでは、あまりにも大勢の出席者の中、遠くで拝見するだけで、お声を掛ける事さえ叶いませんでしたが、先生は終始、満面の笑顔で嬉しそうだったお姿が今も脳裏に浮かびます。田沼先生にお会い出来たのは、この時が最後となってしまいました。田沼武能先生ありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。合掌 (写真提供・杉山氏)



田沼武能先生を偲ぶ

日本写真芸術学会会長、日本大学
芸術学部 特任教授 高橋則英

私が田沼武能先生のお話を最初に伺ったのは1997年3月のこと。写大ギャラリー「木村伊兵衛と土門拳」展会場で開催された日本写真芸術学会フォーラ

ムでのご講演でした。「師・木村伊兵衛を語る」という演題での田沼先生の率直でしかも軽妙洒落な語り口が記憶に残ります。その後、日本写真芸術学会の役員合同会議や、2007年からの日本写真家協会による日本写真保存センターのプロジェクトで定期的にお会いすることになりました。これらの機会に長くお話することはあまりありませんでしたが、いつも優しい笑顔で接して頂いたことを覚えています。

田沼先生と親しくお話したのは、2019年に田沼先生が文化勲章を受章されたことを受け日本写真芸術学会が特別名誉賞を差し上げた2020年の7月でした。コロナ禍で授賞式は行えず、ご自宅に表彰状とトロフィーをお届けに上りました。自ら茶菓をご用意下さっておもてなしいただいたこと、展覧会場に作者がいなくてはと、コロナの状況下で大阪に行く予定だとお話されていたことも先生のお人柄が偲ばれることとして印象深く記憶に残ります。

実は冒頭に記した日本写真芸術学会のフォーラムでは金子隆一氏が講演されていました。その金子氏も残念ながら昨年6月に逝去されましたが、7月末まで開催の金子氏の追悼展では田沼先生も発起人として名を連ね、追悼文を寄せておられます。その原稿を校了された直後に田沼先生が亡くなられたということを実行委員の石田克哉氏より伺いました。最後までお元気で誠実に仕事に打ち込まれていた田沼武能先生のお人柄を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げる次第です。

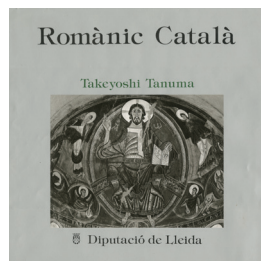


時代を超える「写真の力」

編集者 多田亜生

報道写真家として長い道のりを歩み、最後まで現役として本懐を遂げられましたことに深甚の敬意を捧げます。常に大きなテーマをっかけ、渾身のエネルギーで徹底的かつ繰返し追いつづけて写真展や写真集として発表されました。その根底には「人間の尊厳」を写真で表現するつよい意思がありました。私は『アンデス讃歌』(1984年)から『トットちゃんと訪ねた子どもたち』(2021年)まで、十余冊の写真集の制作にかかわらせていただきました。

とくに印象に残る写真集があります。それは1983年、田沼先生が偶々訪れたバルセロナのカタルニア美術館で、血と汗と土の匂いの濃い、生活感にみちた素朴な木彫群に魅了され、それがきっかけで、4年がかりでカタルニアの山間僻地の村落に残る小さな聖堂を



田沼武能写真集『カタルニア・ロマネスク』(カタルニア語版、スペイン・レリダ市政府、1990年)

巡歴されました。当時バルセロナに居を構えていた堀田善衛氏などの協力を得て、写真集『カタルニア・ロマネスク』にまともりました。自治志向のつよいこの地方は、ながらくフランコ独裁政権により教育や出版などの公の場でカタルニア語の使用は禁じられてきました。しかし自治州内のレリダ市政庁の英断でカタルニア語版の出版がきまり、千年余、人びとが守り続けてきた文化財が国の内外にカタルニア語とともに紹介されることに、大きな誇りと喜びをもって迎えられました。写真は森羅万象を記録し表現する個人的な営為ですが、すぐれた作品は時代と社会を超えて人びとに訴えかける「文化財」であることを痛感しました。



撮影：加藤雅昭

田沼氏の言葉

一般社団法人 日本写真著作権協会
(JPCA) 常務理事 棚井文雄

田沼武能氏が率いる JPCA の存在を意識したのは、2004 年春のことだった。氏の片腕だった瀬尾太一氏をきっかけに、「協会の仕事を手伝ってもらいたい」と声を掛けていただいたことに

始まる。しかし、当時の私は欧州へ活動拠点を移すことを検討しており、渡英を機にこの話はお断りした。その後、ニューヨークに移り、ギャラリーとの契約や作品発表に際して「著作権」「肖像権」といったそれまで直面しなかった問題と向き合い、英文の肖像権裁判ニュース記事を苦労して読むなどしていた。やがて、そんな経験を知る由もない田沼氏、瀬尾氏から日本へ帰国した直後に連絡を受け、少しでも良いからと協会運営に関わっていくことになる。

田沼氏と深く写真について話をするようになったのは、氏の作品「東京わが残像」について、木村伊兵衛作品と比較したコメントを私が発して以来だと記憶している。自分でもよくいったものだと思うが、私の言葉に対して共感を示すような氏からの返答だった。

瀬尾氏の後を受けて常務理事となつてからの関わりは更に密となり、協会運営の裏話や、トラブルの解決法などを教示いただいた。スムーズな運営ばかりではなかったとの話を聞き、驚いたことを覚えている。田沼氏といえども想像以上の苦悩や葛藤をされて現在があったのだ。

最後にご自宅でお会いした際には、より穏やかな、また希求するような口調でこう語られた。「瀬尾のやってきたことや、写真家のことはあんたが一番わかってるんだから、これまでに俺が教えたことをやってもらわないと…写真家がやらないとダメだ」と。

写真家と写真界を想つての田沼氏のこの言葉は、まるで遺言であつたかのように今も私の耳に響いている。

師から得た学びと幸せ

日本写真作家協会 (JPA) 前会長 棚井文雄

日本写真著作権協会 (JPCA) の活動を通じて田沼武能氏と出逢ったことで、氏が木村伊兵衛氏の助手時代に受けた教えや、田沼氏の思想も授けていただくことが出来た。このようにして先達たちの魂を受け継ぐチャンスを得られたことは、少年期より写真家を目指してきた者にとって、とても幸せなことだ。

十年余り海外で活動していた私が、日本へ拠点を移した直後、運命だったかのように田沼氏がリーダーシップを取ってきた JPCA と関わり、写真著作権の啓発活動に携わるようになった。JPA としても、JPCA との共催による「写真著作権セミナー」を全国で開催させていただき成果が上がっている。

ただし、協会の運営に携わることは、「写真家として、自身の作品制作との時間的バランスをどう取るのか」という難しさがあり、ずっと葛藤してきたことも確かだ。とはいえ、戦後の写真界を築き上げてくれた写真家たちへの深い感謝もあり、ほんの少しでも先人たちへの恩返しになるならと思い、今日まで関わってきた。

田沼氏は、写真のこと、政治のこと、世界のこと、様々なことを語ってくれた。そこから、たくさんの学びを得た。そして、写真家にとっての作品への考え方がかなり近しく、また、協会運営におけるポイントや危機感が完全に一致していることは、今後さまざまな判断をしていく際に迷いをなくしてくれるに違いない。

写真への想いということにおいて、同じ感覚の人から教えを受けた幸せを、いま改めて噛み締めている。田沼さん、あなたの言葉を、スピリッツを今後の活動に生かしていきます。合掌。



田沼武能先生と日本写真文化協会
一般社団法人 日本写真文化協会
会長 田中秀幸

田沼先生のご逝去の報はあまりにも急でした。一週間ほど前に (一社) 日本写真著作権協会のオンライン会議で明快なご挨拶をされていた姿はつきりと記憶されています。(一社) 日本写真文化協会 (以下文協) はどれほどお世話になったかわかりません。

昭和 63 年より平成 28 年まで 29 年間、文協主催「全国写真コンテスト」の審査員をお願いしてまいりました。内閣総理大臣賞を有するこのコンテストがプロ、アマを問わず広く社会から高く評価をされてきたことも、先生の長年にわたるご指導の結果と感謝しております。審査では、多数



平成 29 年 3 月 第 63 回全国写真コンテスト審査風景

の応募作品であっても一枚一枚丁寧にご覧になりながら、「作者のこの一枚に込めた想いを大切にしなければいけない」と、いつもおっしゃっていました。常に、写真館の団体が主催する写真コンテストであることを念頭に、文協の内部審査員に声を掛けられながらの審査でした。

田沼先生には、私どものポートレートギャラリーで2回の写真展を開催していただきました。平成15年3月の「地球の仲間たち」。そして平成29年1月の「ふる里悠々 武蔵野日記 Part II」は、新年の企画展ということもあり、オープニングパーティーの会場に入りきれず、控室や階段ホールにまで人があふれ、本気で床が抜けるのではないかと心配したほどでした。

先生から見れば外部の団体であるにもかかわらず文協に寄せていただいた思いを決して忘れることはありません。一枚の写真を大切に、その気持ちを持ち続けて私たちも頑張っています。長い間、本当にありがとうございました。



平成29年1月開催「ふる里悠々 武蔵野日記 Part II」のオープニングパーティー、ご夫婦で。



田沼さんを偲んで
公益社団法人 日本漫画家協会
会長、漫画家 ちばてつや

最後にお会いしたのは3年前、東京の大きなホテルで開催された文化勲章受章のお祝いの会でした。ご本人も奥様も嬉しそうだったけれど、それよりなによりお祝いに集まった周りの人達がみんな我がことのように心から喜んでいて、ああ、この人は本当に誰からも愛されている人なんだなあ、と微笑ましく思ったものです。私は漫画を描くとき、昭和の風景や人びとの暮らしぶりを調べたりするときに、しばしば田沼さんの写真集を開いて参考にさせていただきました。

その都度気付いたことですが、なんというか、写っているものが子どもであれ大人であれ、無機質なはずの街並みですら「被写体」という硬い殻を脱ぎ捨てて、イキイキと生命感に溢れているんですよ。田沼さんの持つファインダー越しの目線が、どこまでも温かく優しいからなのでしょう。出版の会議などでお会いしたときも、田沼さんが入って来るとその場が和らいでふわっと明るくなる、そんな貴重な人でした。だから、あんなにお元気だったのに突然のお別れを知って呆然としました。もう二度とお目にかかれないうと思うと、本当に残念で心の底から寂しい。今は只、瞑目して、謹んでご冥福をお祈りします。



田沼先生の「顔」
キヤノン株式会社 常務執行役員
ICB 事業本部長 戸倉 剛

田沼武能様の訃報に接し、心より哀悼の誠を捧げます。
田沼先生と弊社は大変深いお付き合いをさせていただき、様々なお顔を私たちにを見せてく

ださいました。

ひとつは、時代を切り取る写真家としてのお顔です。被写体は子どもから大人まで、老若男女・洋の東西を問わず意欲的に作品制作に励まれたお姿には、尊敬の念を禁じ得ません。機材面ではフィルムからデジタルまで、弊社一眼レフを歴代にわたって撮影の相棒に選んでいただきました事に感謝申し上げます。

もうひとつは「写真の権利と写真家の地位向上」を目指した先駆者としてのお顔です。

JPSは全日本写真著作者同盟（現日本写真著作権協会）設立、著作権法の改正や写真保存センターの立ち上げなどに働きかけを行ってきましたが、その根底には先生の強い信念が息づいていました。弊社も時機に触れその活動にご協力できたことは至極の喜びです。

更に写真展会場や講演会の中では、時に江戸っ子気質の「べらんめえ」調が口をついてくるのももうひとつの魅力的なお顔です。そんな人間味溢れる先生の笑顔と実行力で写真業界をお導きいただきました。

私たちキヤノンは、先生のご意思を強く胸に刻み、技術の進化と共に社会の幸せにつながるようさらに写真文化の継承と業界の発展に尽力してまいります。

長きにわたりお導きいただきましたことに重ねて感謝申し上げますとともに、引き続き業界の行く末を暖かくお見守りください。ありがとうございました。



田沼さんの志を受け継ぐ
朝日新聞社
代表取締役社長 中村史郎

朝日新聞社は田沼さんと浅からぬ縁を持たせていただきました。エピソードには事欠きません。

ハイライトのひとつは、写真界への長年の貢献を理由に受けていただいた2019年度の朝日賞特別賞です。一報を受けた田沼さんは妻・敦子さんの前で手をたたいて喜んでくれたそうです。帝国ホテルでの贈呈式ではご緊張なさったのでしょうか。受賞のスピーチがしどろもどろになり、周囲をはらはらさせました。ご本人は「頭の中が真っ白になってしまった」と恐縮なさっていましたが、誰に対しても決して偉ぶらず、愛されるお人柄でした。

2011年の夏には東日本大震災の被災地をめぐる弊

社のヘリコプターに同乗いただきました。82歳の田沼さんはレンズ越しに目をこらし、何度もシャッターを切っていました。大家になってからもカメラバックを手放さず、現場を大切になさっていました。

田沼さんといえば、世界中の子ども達の写真や文化人の肖像写真が有名ですが、個人的には、2019年に世田谷美術館で催された「田沼武能写真展 東京わが残像 1948-1964」の作品群が強く印象に残っています。東京の下町の原因風景を見ていると、撮影している田沼さんの優しいまなざしが目に浮かぶようでした。

スマホの写真がインターネットで気軽に共有できる時代です。確かな視点で現場を切り取る写真家の地位が希薄になることを田沼さんは心配していました。弊社は、田沼さんの師匠だった木村伊兵衛さんの名を冠した写真賞も1975年から主催しています。言論・報道機関として、これからも田沼さんの志をしっかり受け継いでいくことをお誓いします。



東日本大震災から半年。田沼武能さんは朝日新聞社ヘリコプター「ゆめどり」に搭乗して被災地を巡り、被害状況を克明に記録していた。2011年8月14日、宮城県上空で、渡辺幹夫撮影



田沼武能氏の見続けた時代 講談社 代表取締役社長 野間省伸

田沼武能氏と弊社の繋がりは長く、古くは『婦人倶楽部』、創刊時の『小説現代』での撮影から様々な仕事を経て、平成4年度より講談社出版文化賞写真賞の選考委員をその賞が終了する平成30年度までお務めいただきました。たとえば現日本写真家協会会長の野町和嘉氏のご受賞された平成5年度は熊切圭介氏、佐藤明氏、椎名誠氏、篠山紀信氏そして田沼氏が選考委員を務められておりました。受賞作の選考にあたっては真剣な議論がくりひろげられ、進行担当者が毎回手に汗握るほどだったと聞き及んでおります。

一方で米タイムライフ社との契約をはじめとしたその輝かしいご活躍にもかかわらず気さくで飾らないお人柄のためか、写真賞の贈呈式や祝賀会で



平成5年度の講談社出版文化賞写真賞受賞者 野町和嘉氏（左）と選考委員の田沼武能氏（右）



平成13年度の講談社出版文化賞贈呈式では乾杯のご発声をいただきました。

はいつも周りにはなごやかな方々であふれており、笑い声が絶えませんでした。そのお人柄は作品群を見れば深く納得するところです。

弊社刊行物としては『ぼくたち地球家族』（1994年刊）、黒柳徹子氏と途上国のこどもたちとのふれあいを活写した『トットちゃんとトットちゃんたち』（2001年刊）などがあり、宗教や国の違いを超えて地球規模で“人間”をとらえ、子ども達に希望を見出そうというあたたかな信念が作品として結実しています。

16歳の時にお住まいの浅草で東京大空襲に遭遇した田沼氏は、焦土と化した東京から昭和、平成、令和にわたって、変化著しい社会の移り変わりを経て、なおぶれることなく人間の本质を見続けてこられたといえるのではないのでしょうか。思い出すのはいついかなるときにも肩からカメラを下げておられた田沼氏のお姿です。ご生前の功績を偲び心からご冥福をお祈りいたします。（写真提供・講談社）



撮影：武藤奈緒美

田沼武能氏を偲んで

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会
会長、文化芸術推進フォーラム 議長、

能楽師（狂言 和泉流） 野村 萬

突然の御逝去の報に接し、只々驚愕の思いでありました。

図らずも、令和元年に文化勲章受章の荣誉に共に浴したその年の暮、学生会館にて催された著作権情報センター主催の著作権パーティーでお目にかかったのが最期であったと存じます。

田沼さんとは折に触れ様々お話しする機会はあったものの、話題は常に其々がお預りしている組織が抱えている悩みや問題点であり、迂闊にも木村伊兵衛先生が師である事や、浅草生まれの江戸っ子である事までには話が及びませんでした。

戦後、駒込にあった染井能舞台（現在の横浜能楽堂）に、私の父、六世野村万蔵の舞台を木村伊兵衛先生が撮影にいらっしゃった事があり、今思うに不思議な御縁を感じられます。戦前戦後と激動の時代を共に呼吸し、優れた写真家である撮影者、実演家で被写体である己と、職業と立場は違えど、心を一にして共に在った時間を有難く思いつつも、先に旅立たれてしまった事に喪失虚脱の思いを禁じ得ません。次代を担う方々には、田沼さんが努力し築上げた礎を大切に、未来に向けて継承して頂きたいと強く念じております。

作品から滲み出る慈愛に満ちたお人柄、文化勲章受章式に御自身の分身ともいえるカメラを携えていらしたお姿を懐しみ、様々な場において御指導賜りました事を深く感謝申し上げ、心より御冥福をお祈り申し上げます。合掌



文士の写真

公益社団法人 日本文藝家協会
理事長、作家 林真理子

田沼さんご逝去の報を聞き、心からお悔やみ申し上げます。私ども日本文藝家協会は、田沼さんに本当にお世話になっております。

私どもが富士山のふもとにある富士霊園に、「文学者の墓」を創設したのは昭和44年のこと、現在では八百人ほどの会員がここに眠り、一般に公開されております。今から三年ほど前、この霊園入り口にある建物を貸すので、何かやりませんか、というお話をいただきました。法事などに使われていた、なかなか風情のある建物です。いろいろ話しあった結果、文学者のパネルを飾ろうということになりました。そしてどうせやるなら、田沼武能さんのような大家の作品がいいという声があがったのは、まことに無縁なことだったでしょう。しかし田沼さんは快諾してくださり、貴重なお写真を貸してくださったのです。今では川端康成、尾崎士郎と井上靖、開高建、亀井勝一郎と、昭和を代表する作家たちが一堂に並び、おかげさまで大好評を得ています。

公開にあたり、文春ギャラリーでオープニングパーティーが開かれました。この時田沼さんは「戦時中に青春時代をすごした私は、なかなか勉強が出来なかった。私の勉強の原点は、この先生方にお会いして、いろいろなお話をうかがったことです。皆さまに感謝しています。」とスピーチされました。そのお姿が忘れられません。ご冥福をお祈り申し上げます。



田沼武能さんを偲んで

一般社団法人 出版物貸与権管理センター
代表理事、漫画家 弘兼憲史

田沼さんと初めてお会いしたのは、僕が2014年から理事を務める事になった出版物貸与権管理センターの総会、理事会の席でした。当時は先日亡くなら

れた藤子不二雄^①先生が長く務めた理事を退任される時で、藤子先生の代わりとってはおこがましいですが、コミック作家の代表として入ってくれということで理事にさせていただきました。

田沼さんのお歳を聞いてびっくりしましたが、朗々快活全くとってお元気で、普通にお話される時はニコニコ話されるんだけど、会議の席では別人の真剣な眼差しが、さすが写真家の眼差しだなあと見ていました。コロナの感染拡大で、センターもリアルでの会議や懇親会が中止となってしまうと、田沼さんとも顔を合わせてお話が出来ずにもう3年も経ってしまっ

たんですね。突然の訃報、本当にびっくりしました。

今回センターは理事の改選期にあたり、僕を含めて現在の理事の皆さん全員が再任され、また一緒に頑張っているなと思っていた矢先のことでしたので大変驚きました。あの笑顔がもう見れないのだなと思うと大変残念です。僕はペンでコミック、田沼さんはカメラで写真。コミックと写真という表現方法は違えども、わかり合える部分もあり、だからこそ田沼さんが生きてきた足跡は、田沼さんの一瞬を切り取る映像の中にも今も生きていと思うし、これからも生き続けると思っています。大変惜しい方を亡くしたと思います。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。



希望と平和への思い、今も田沼武能さんをしのぶ

毎日新聞社

会長執行役員 丸山昌宏

東京大空襲の炎をかいぐつった経験を持つ田沼さん。作品の数かずから、現状のその先に垣間見える“希望”そして“平和”

への思いがにじみ、心を揺さぶられます。

毎日新聞社が本社を置くパレスサイドビルに長くオフィスを構えておられ、写真コンテストの審査員をお願いしたこともありました。その際うかがった鋭い考察には深い感銘を受けました。

最後にお会いしたのは帝国ホテルで開かれた、写真家として初めての文化勲章受章を祝う会でした。にこやかで人なつっこくて、多くの出席者に囲まれていました。(写真右、毎日新聞社提供)



会では、ユニセフ（国連児童基金）の親善大使でもあった黒柳徹子さんが「いつまでも現役でいてください」と話されていました。黒柳さんがアフリカやアジアなどを親善大使として訪問されたときに同行していたのが田沼さんでした。世界の片隅で子どもたちに寄り添った作品からは、「どんなに過酷な世界に生きていようと、明日を信じて」という応援歌と、写真を見る者に「あなたは何ができるのか」という問いかけが伝わってきます。ロシアのウクライナ侵攻、安倍晋三元首相銃撃事件など、愚劣な行為がはびこる今だからこそ、田沼さんの作品がますます光り輝いて見えます。

いつまでも写真を撮り続けてくださると思っていましたので、ご逝去の知らせは残念でなりません。フィルムの保存活動や著作権問題などにも取り組み、日本の写真界発展への貢献は計り知れません。心からご冥福をお祈りいたします。



今ここに一枚の葉書を手に
一般社団法人日本スポーツ写真協会
会長 水谷章人

田沼武能先生の突然の悲報に接し、誠に痛恨の極みです。衷心より哀悼の意を表します。

田沼先生に初めてお会いしたのは、私が公益社団法人日本写真家協会に入会する時のことで、先生が40歳、私が30歳の頃になります。先生とはこれまで親しくお付き合いをさせていただきました。特に思い出深いのは30年ほど前、先生と一緒に国立西が丘競技場へサッカーの写真を撮りに行った時のことです。2人並んで撮影をし、写真について大いに語り合いました。「昔、スポーツを撮ったことがあるんだよね」とおっしゃっていた先生の笑顔が、まるで昨日のもののよう思い起こされます。写真の分野は違っても、田沼先生は私にとって尊敬する写真家であり、折に触れて励ましやアドバイスをくださる心強い先輩でした。ご自身の精力的な活動に留まらず、先生の眼差しは日本の写真界全体に向けられ、その功績には計り知れないものがあります。そして、常に尽力してこられたお姿に、多くのことを学ばせていただきました。

今ここに、一枚の葉書があります。今年の春に、田沼先生からいただいたものです。そこには近況や、お贈りした本への温かな言葉が綴られていて、その葉書のもう一面からは、先生が長年取り組んでこられた武蔵野の写真がやさしく語りかけてきます。まさかお別れしなければならないとは、いまだに信じられない気持ちです。田沼先生、長い間、本当にありがとうございました。どうか安らかに眠ってください。



懐かしいすぐれた人
公益社団法人 日本写真協会
名誉会長 宗雪雅幸

「田沼さんが仕事になくなられた」という知らせを受けたとき、6月1日の「写真の日」であったことを思い出し、いかにも田沼さん、と思ったことでした。

田沼さんとの深いかわりは日本カメラ財団のギャラリーで行われた「カタルニア・ロマネスク」写真展を見たのがきっかけでした。感動のあまり手紙を書き

送ったのが始まりでした。私が会長をしていた写真協会の副会長を引き受けてくださり、あの辛辣だが温かい、率直な物言いですばるん助けにいただきました。いつもカメラを手放さず、お働きでした。

写真家の権利、著作権活動や作品保存などにも身を削って関わられました。写真館であった浅草の生家を戦災で焼け出され苦労して写真家の道を切り開くのですが、その挑戦のしぶとさ、熱心さには驚きます。「カタルニア・ロマネスク」もまたま人物撮影を頼まれた堀田善衛氏の出会いから実現した写真撮影でした。

すごい勉強をしています。ライフワークとなった「世界の子どもたち」の写真も自費で志願し撮り続けた命がけの写真集です。すごい人だと思います。

あるサロンのパーティーで奥様の作られた飛び切り美味しいチョコレートを頂いたことがあります。その折、奥様の「とおちゃん！」と呼びかけるお声を耳にして心が和みました。むかし僕らが子どもの頃、父をそうやって呼んでいたことを思い出しました。田沼さんは50歳という遅い結婚だったということですがこの温かいご家庭人でもあったのです。



感謝を込めて繋ぐ想い
協同組合日本写真家ユニオン
代表理事 村田三二

私ども協同組合日本写真家ユニオンは、貴協会の中で準備をされて、19年前に日本で初の全国組織の写真家の事業協同組合として誕生することができま

した。田沼先生の訃報に接し、当時のニュース冊子を読み返してみますと、先生からの激励メッセージが掲載されていました。そこには正式な協同組合設立のために実に44年もの歳月かけてようやく認可が下りて、完結できたとお言葉があり、改めて責任の重さを実感した次第です。

思い起こしますと私が田沼先生に初めてお目にかかったのは、女性誌のインタビューでご自宅に伺って撮影させていただいた時でした。それは30年も前のことですが、写真家を撮影することに緊張気味の私にたいそう温かく接して下さったのを覚えています。

生涯現役を貫かれた写真家として尊敬するのはもちろんのこと、長年にわたり写真界を牽引され、組織のリーダーをなさってきた先生に触発されるように私も



1989年6月 数寄屋橋で写真著作権の保護期間の法改正を求める街頭署名



1997年2月 `97JPS展公募作品審査 JCI会議室



2001年5月 文部科学省での社団法人設立認可公示



2001年12月 米国同時多発テロ事件「写真展示即売会」東京国際フォーラム

いつかは自分のためだけでなく、自分を育ててくれた写真界にお返しをするような生き方がしたいと感じるようになりました。それから四半世紀が経ち、ユニオンの理事となりましたことで、著作者団体協議会の会合で一緒にすることができ、それは私にとってはギアを一段上げて頑張るきっかけにもなりました。先生の終活リフォームの著書も拝読し、現在ユニオンでは写真家のための終活サービスにも取り組んでおります。

写真の日に旅立たれた田沼先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

田沼武能先生と歩いた武蔵野 むさし野写真の会

事務局 矢野靖博



「武蔵野だい好き人間」写真家、東松友一さんをはじめ、写真だい好き7人が田沼先生と撮影同行、プロアマの隔たりのないお気遣いに、心とむ撮影現場でした。撮影は早朝、いつも奥様の愛妻弁当、私たちの分まで、撮影機材に人数分のお弁当、すごい重量です。

武蔵野の雑木林をはじめ、様々なシーンでは所かまわず横になったり、狙った被写体にはいつも1時間程そこにとどまります。まれに姿を見失うこともあります。そして、撮影帰りの先生はいつも泥んこです。

むさし野写真の会が発足して、2011年から2年おきに、田沼武能と7人の仲間による「それぞれの武蔵野」写真展をアイデムフォトギャラリー「シリウス」にて開催。2019年10月29日第5回写真展会期中、写真家、田沼武能氏写真分野で初めて文化勲章受章の報道を受け、会場がお祝いで祝福のあらしに。その瞬間を仲間と共有できた事。素晴らしい思い出として心の印画紙に焼き付いています。



6回展も盛況裡に終わり、写真展は足かけ12年になりました、次回もやるぞ！田沼先生として7回展はかなわぬ事となりましたが、先生の意志を継ぎ、2023年に今までいっしょに歩いた「それぞれの武蔵野」7写真展を追悼写真展として検討しているところです。

今後とも、むさし野写真の会に変わらぬご指導を賜れば幸いです。(写真提供・矢野氏)



田沼武能先生を偲んで 富士フイルム株式会社

取締役常務執行役員 イメージング

ソリューション事業部長 山元正人

田沼武能先生は、日本のプロ写真家を代表するお立場で、21年の長きにわたり、公益社団法人日本写真家協会会長を務めら

れました。その間、プロ写真家の権利擁護から、表現、創作活動を通した写真文化の振興、人材の育成、著作権の啓発等、日本の文化発展に多大な成果をあげられました。田沼先生の並なみならぬご尽力に心より感謝申し上げますとともに、写真家として生涯現役を貫かれた姿勢に心から敬意を表します。

田沼先生には、弊社フォトサロンで何度も個展を開催いただきました。中でも2020年にフジフイルムスクエアで開催された「わが心の東京」では、「生まれ育った浅草が1945年の大空襲で灰燼に帰す中、自らも業火をくぐって命からがら生き延び、どん底の生活が始まった。それでも嘆くことはなかった。自分には夢があったからだ。」というご挨拶をいただきました。ユニセフに同行して干ばつや貧困に苦しむアフリカ、紛争地帯など40か国に上る世界各国の子ども達を撮り続けられた写真家としての原点が、このご挨拶のお言葉にあったのではないかと改めて感じております。

弊社が創立80周年を記念して立ち上げた、「フジフイルム・フォト・コレクション」には、田沼先生の作品を大切に收藏させていただいております。その作品に込めた想い、そしてご遺志を受け継いで、当社はこれからも写真文化の発展に貢献してまいります。

生前の御恩に深く感謝申し上げ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



田沼武能先生を偲んで

東京工芸大学 学長 吉野弘章

田沼武能先生は、1949年に当時東京写真工業専門学校という名称であった本学を卒業し、1995年より2001年まで芸術学部写真学科の教授として教鞭を執られた。2002年からは客員教授および名誉教授となり、また2001年から2021年まで20年にわたって本学の同窓会長を務めてくださった。



2006年5月 文化庁に日本写真保存センター設立要望書を提出



2010年8月 創立60周年記念写真展「おんな」オープニング 東京都写真美術館



2012年9月 「生きる」フォトキナ展 ドイツ連邦共和国 ケルン市ケルンメッセ



2019年11月 写真家初の文化勲章を受章 「宮殿松の間」(代表撮影：産経新聞社)

近年では親しくお話しさせていただく機会も多かったが、常に率直で暖かい人柄であり、一方で物事の本質を見抜く鋭さにはいつも感心させられた。そして田沼先生にお目にかかる度に心に浮かぶのは「生涯現役」という言葉であった。90歳を過ぎてても好奇心と探究心を持ち続け、いつも「もっと見る人の心を打つ写真を撮りたい」とおっしゃっていた。

そんな田沼先生の写真展を、本学の中野キャンパスにある写大ギャラリーで2019年に開催した時のこと、会場の作品レイアウトにいらした先生は、撮影機材が一杯に詰まった大きなカメラバッグをお持ちで、聞けば午前中にライフワークの一つである武蔵野の撮影に行ってきたという。それから1時間ほど一緒に展示作業をした後、帰宅されるのかと思いきや、撮りたいものがあるので再び武蔵野に戻るとのことだった。その時に手渡した、田沼先生のカメラバッグのズシリとした重さが、いまも手に残っている。まさに写真家として「生涯現役」を全うされたことは立派だった。奇しくも命日である6月1日は「写真の日」であり、これから毎年「写真の日」を迎える度に、私たちは田沼先生を偲び、その功績にあらためて感謝することになるだろう。

田沼武能先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



写大ギャラリー 田沼武能写真展
「童心-世界の子ども」にて
2019年3月5日



田沼武能さん回顧

東京写真記者協会

事務局長 渡辺幹夫

「写真はね！好奇心を忘れちゃあ、撮れないよ」 東京都内で年末恒例となる東京写真記者協会主催の報道写真展に訪れ、居合わせた写真を学ぶ大学生に語り

かけた。

田沼さんのお付き合いは新聞社のデスク時代からで、ほぼ四半世紀にもなる。新聞社もご多分に漏れず個性豊かな記者たちの集まり故に、ときに組織論で話が盛り上がった。「写真家というのは個性の集まりでしょ。それをひとつにまとめるのは至難の業だったのよ」と日本写真家協会成り立ちのよもやま話をよく拝聴した。長年かけて個性豊かな写真家集団をまとめあげ、その結果、写真を文化芸術として世の中に認知させた功績と、写真文化の発展に寄与した力



都内で行われた名取洋之助展で等身大の師匠・木村伊兵衛と自身の写真が展示され、記念のポーズをとる田沼さん。2013年12月18日

は絶大なものとなった。

ここ数年は、年間を通じて優秀な報道写真を表彰する東京写協表彰式に来賓としてお招きし、第一線で報道の現場に携わる新聞・通信社の写真記者に向けて「喝」を入れてもらっていた。常に自らカメラ持ち歩いて写真を撮る。その活力の源は「肉」。大の肉好きで、何歳になってもそのパワーは衰えなかった。とはいえデジタル写真が台頭し、誰でも容易に楽しめる時代になったことで、写真自体が安価なものになり、写真家そのものの存在価値が薄れていくことを憂いていた。報道写真展会場で、学生から「これまで撮影してきたなかで一番いい写真は」と問われると「あす撮る写真かなあ」と微笑みながら答える。

生涯現役にこだわった報道写真家だった。

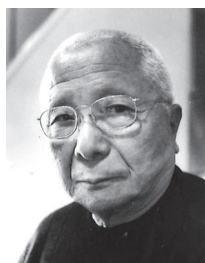


自宅作業場には、自らの写真とともに、恩師・木村の写真も管理していた。2016年8月22日



文化勲章受章記念パーティーの前に、写真著作権の立役者・瀬尾太一さんとともに。2020年2月10日

【日本写真家協会 名誉会員からの寄稿】



田沼武能さんを偲ぶ

名誉会員 川田喜久治

1950年代、創刊当初の『芸術新潮』『新潮』などのグラビアで田沼さんの写真を初めて拝見しました。日本文学の作家たちの風貌を日常の中で端正に捉えていたのが心を打ったのです。まもなく私も文芸誌の仕事をするようになって同じような課題を与えられましたが、どう取り組んで良いのか途方に暮れたものです。

1960年のはじめ、日本にマグナムをと「集団フォト」が作られ、木村伊兵衛、土門拳、三木淳、大竹省二、稲村隆正、長野重一、田沼さんもその中で活躍されましたが、のち、タイム・ライフの仕事が中心となり、グラフ・ジャーナリストとして数多いレポートを残されました。特に「ソマリアの子たちをカバーした写真ではそのやさしい眼差しのにかに、ただならぬ怒りが隠されていることに気づき息をのみました。

『カタルーニア讃歌』田沼さんとの共著1984年 新潮社版のあとがきに著者である堀田善衛が書いています。「写真家の田沼武能氏とは、すでに30年来の知り合いである。人々の、さりげない日常をとらえるについての、氏に独特なアングルには、つねに感服をさせられて来たものであった。」(原文のまま)と。そのアング

ルとは、人々の面影をやさしさの光と影にかえた賛辞に違いありません。木村伊兵衛、土門拳という大いなる先達に愛され、両氏の写真集、評論集などを編みつけ、師弟の礼と無私の心を明らかにしたのも深い教訓でした。写真文化へのご尽力にたいしての感謝とご冥福を心からお祈り申し上げます。

さようなら田沼武能さん

名誉会員 木村恵一



6月1日写真の日の翌日、田沼武能さん逝去の知らせが突然伝えられてきたが、俄かには信じられなかった。ほんの一週間前、会長をしている全日本写真連盟で近くに開かれる理事会のことなど電話で元気に話を交わしたばかりだったので、声もなく暫し呆然としていたことを憶えている。

田沼さんとの出会いはもう六十数年前に遡る。母校の教壇で、師でもあった渡辺義雄先生のお供をして、銀座で開かれている木村伊兵衛先生の写真展に伺った際、会場で紹介されたのが初めてでした。1950年代から60年代にかけて、田沼さんは東京下町の風土と子ども達の写真を精力的に撮っていたことはよく知られていますが、同じ東京下町生まれ育ちということもあって、その日をきっかけに親しく声をかけてくれ、つき合いもしてくれました。その後、田沼さんは新潮社の雑誌『藝術新潮』などで昭和時代を賑わせた著名人の人物写真を撮りはじめ、それらの多くの写真の表現などが高く評価され、プロ写真家としての確固たる地位を築かれた。画家、作家、音楽家、役者など、時代を創り上げた気難しい著名人たちを手玉にとるように鮮やかに個性を引きだす鋭さと共に温かで豊かな想いが表現された多くの写真がとても魅力的でした。

時は移り1976年、世の中少し落ち着いてきた頃、田沼さんの声がかかりで東京下町生まれの写真家が年1回ぐらい集まってはどうかということで、花見の会が始まった。第1回は上野で濱谷浩さんを筆頭に10人程度だったが、いまは“東京生まれ写真関係者花見の会”という長たらしい会名でもう48年も続いている。写真家の他に編集者やカメラメーカーの人まで加わり、メンバーも40人を超えるように賑やかな会になった。コロナでここ2年ほど中止になったが、上野池之端の東天紅の階上より満開の美しい桜並木の夕暮れを眺めながら、田沼さんとゆっくり盃を交わしたのが最後になってしまった。浅草下町特有のべらんめえ口調で春のひとつきのお酒を楽しんだ日びがもう来ないのが、とても残念です。生前の偉大な功績を讃え偲びつつ、安らかに眠りにつかれますことを願い、ご冥福をお祈りいたします。合掌



心よりご冥福を

名誉会員 栗林 慧

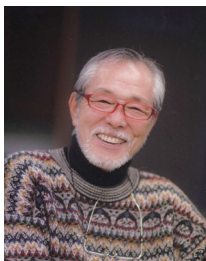
フィルム写真時代を共に歩んで来た先輩達がここ数年の間に次々と世を去っている。そしてこのたび長年会長を務めてこられた田沼武能氏が亡くなられた。

その日は奇しくも6月1日写真の日だったと聞かされて、人生を写真の世界で生きて来られた氏らしいその終わりに、多くを感じないはいられない。田沼氏との出会いは、もちろん自分も在籍50年を超す古株会員であるので、その間ときに会合等で顔を合わせることがあっても、目指す分野が異なることもあり、親しく語り合うことはなかった。

近づきになれたのは、氏が会長になられてからである。個展や授賞式の際に案内状を差し上げると、必ず来て下さって、その際「僕は虫は嫌いだけど、栗林さんの写真は好きだ」とあの親しいにこにこ顔でいって下さるのが、本当に嬉しく感じたものである。

この世を去られて、今頃はきっと、先に逝った仲間の写真家達に迎えられて、フィルム写真時代の楽しかった思い出に花を咲かせておられることでしょう。

心よりご冥福をお祈り致します。



ありがとう 田沼さん

名誉会員 齋藤康一

6月1日からの福島市での私の個展「昭和の肖像」オープンの翌朝、一番に受けた電話が田沼さんの訃報。5日前に葉書をいただいたばかりなのに。

「(中略) まだ全快まで行かず静養中です。本来ならば写真展を見に行きたいのですが、ままならず失礼させていただきます。小生の顔を出展して頂き感謝しています。御礼まで。田沼拝。」

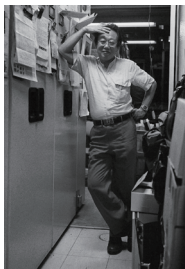
田沼さんの写真の下に喪章を付けたのですが、お元気の氏を眺めていると涙が止まりませんでした。

私のJPS入会(1959年)以前、学生時代からの長いお付き合いをさせていただいており、思い出は尽きません。たぶん私は21歳の頃と思いますが、雪の夜でした。「公演が終わったら有楽町の事務所に帰るから乗っていかないか。」飯田橋付近にあった頃の観世能楽堂。田沼さんは『芸術新潮』の仕事。私は趣味の延長みたいなもの。声を掛けられたことが嬉しかった。田沼さんの車は乳母車の親分みたいなシトロエン。ガッタン・ガッタン、フワフワみたいな乗り心地で、車の中での話も僕にとって楽しかったし、何よりも憧れの先輩。胸がいっぱいになった。

スキーの思い出もあります。当時刊行されていた『サンケイカメラ』編集者が中心になって、トマド会(止

まれぬ、曲がれぬ、どいてくれ）というクラブを作り 20 人程の会員が蔵王、志賀高原に数日遊びに行っていました。田沼さんはトニー・ザイラーの黒い稲妻にあやかっか、上下黒のファッションで決め、颯爽と滑っていました。札幌オリンピック会場で、久しぶりにバツリお会いした折、「また、滑りましょうか」と私。下町生まれの江戸っ子弁で「冗談じゃあねーよ、今は暇もなければ、体もたねえよ。」と超忙しい田沼氏。2 人で大笑いしました。日本写真家協会の会長になられた頃から、会員達の写真展などのオープンパーティーには出来る限り出席し、その度ごとにご挨拶。協会の運営、会議等々。世界を周りながら、撮影に原稿にとの仕事ぶりは驚くばかりの日びといえましょう。写真家として初の文化勲章を 2019 年に受章されました。美しく聡明な奥様。温かい豊かな家族に囲まれ、生涯現役。93 歳天寿を全うされたものの、残念でなりません。

どうか安らかに。出会えたこと、お世話になりましたこと、心から感謝しております。ありがとうございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



田沼氏の事務所にて
齋藤康一撮影



追悼 田沼武能氏を偲ぶ

名誉会員 富岡畦草

田沼武能氏との出会いは、戦後わが国が復興に向けて国民皆がそれぞれの道で一丸となって頑張っていた高度成長期でした。都会で生まれ育たれた田沼氏は、誰にも真似のできないくらい精力的に世界を股にかけて活動されてきた印象が全てですが、23 歳で片田舎から出て来て孤軍奮闘していた僕にとっては憧れの同士であったといえます。僕もわが子の成長記録をライフワークとして長女誕生と同時に 26 歳から 32 年間毎日撮り続けましたが、途中長女の発症に触れ意気消沈しているころ、世界中の子ども達の生活を記録に収め続けている田沼氏の生き方にどれほど励まされたかわかりません。そして、何より日本における写真家の社会的地位向上に専心された功績に感謝の念でいっぱいです。特に日本写真著作権協会立ち上げにも尽力され、わが国における写真家の保護や写真界全体の価値評価を高めてくださり、多くの写真家が救われたと思います。カメラ業界は勿論ですが、社会全体の経済効果にも繋がったと申せましょう。

ここ 20 年間でデジタル化が進みデジタルカメラも益々性能が良くなりましたが、田沼氏の写真集を改めて拝見すると映像技術が変容する現代でも、田沼氏の一貫したメッセージ性の強さは永遠であり、生涯写真

を愛した生き様は、作品そのものであり永遠に残ります。次女と孫に記録写真を託し、96 歳を迎える僕も田沼武能氏の急逝に際し、わが人生を振り返っております。同士よ、ありがとう。合掌。



兄貴分的大先輩、田沼武能さんの死を悼む

名誉会員 中谷吉隆

生涯現役を貫いていた、田沼武能さんの天界行きは残念でならない。私は、昭和 30 年、東京写真短期大学（現東京工芸大学）に入学し、三堀家義さんの助手になる。当時、有楽町の毎日新聞社内のサンテレフォトに事務所があり、田沼さん、佐伯義勝さん、吉田潤さんらが机を並べていた。そんな関係から、日び、雑誌の仕事などをバリバリとこなし、一方で J P S や集団フォトなどで作家活動をしている若手写真家の田沼さんを身近かにしていた。大学の先輩でもあったが、浅草生まれで、べらんめー調の田沼さんは兄貴分的存在でもあった。たまに撮影の手伝いをさせてもらっていたから、正月に、歴代の助手や写真関係者がアパートに集まる会の片隅にいることもあった。仕事の話や写真論を交わされ、最後は酒宴となるのだが、その頃になると酒をたしなまない田沼さんは、さっさとその場を離れていた。そんな時どきに、被写体へのこだわり方などを学んだものだった。書を書家の矢萩春恵さんに習ったのも、こだわりの一つだろうが、なんといっても 50 歳まで独身で、「極めて晩婚の男」といわれていただけに、料理づくりのこだわりは、特別ではないだろうか。

写真は那一コマで、新宿コニカフォトギャラリーでの個展のオープニングパーティー用に、自ら包丁を握り、参加者に腕前を披露し振る舞った。1990 年のことである。

今年 2 月、母校東京工芸大学のタルボット賞審査会で一緒にいたのが最後となったが、とても 93 歳を間近にしたとは思えない動きだった。今は、ご冥福を祈るのみである。ゆっくりお休み下さい。合掌。



パーティーの料理を作る田沼氏
コニカフォトギャラリーにて
1990.10.24 中谷吉隆撮影



田沼武能氏を悼む

名誉会員 松本徳彦

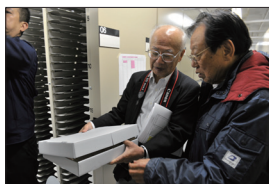
写真の記録性とその価値を受け続けた。

敗戦後間もない焼野原が広がる銀座 8 丁目のビル内で、1948 年 9 月に、木村伊兵衛、渡辺義雄、

土門拳、林忠彦、藤本四八など十数名で発足した「写真家集団」と、翌年3月に発足した「青年写真家協会」秋山庄太郎、石井彰、石井幸之助、稲村隆正、長野重一、芳賀日出男、蘭部澄、三堀家義、田沼武能らの若手写真家によって結成された協会とが糾合して1950年5月誕生したのが「日本写真家協会」で72年前のことである。ここに20歳足らずの田沼さんの名がある。爾来、協会は復興経済の波に乗って成長し続け、60年後の2010年には1750名を超える会員を擁する公益法人組織に成長した。

この間、他の分野と著しく不公平な写真著作権（発行または製作後10年）の下での活動が続いた。歴代の会長はこの差別を解消しようと著作権法の改正運動を続けてきた。1971年にやっと法が全面改正され、著作者の死後50年（1997年）と不公平感は解消したが、田沼さんが最後まで改正を望んだ旧法で保護期間が1966年で消滅した写真の遡及は解消されなかった。

次の活動は先輩たちの撮影されたフィルムが次々と廃棄されたりして、写真の記録性が失われている現状を憂慮して、撮影フィルムを長期保存する「日本写真保存センター」の設立を文化庁に要望（2006年）した。翌07年から文化庁委嘱による「写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」調査費が設けられ、調査・収集が始まり、現在約40万本のスキャンを行うなどしているが、コロナ感染症禍の影響による支援組織の経費減で、苦境に至っているが、経費削減などで活動を縮小している。田沼さんの願望、すなわち「写真の記録性の大事さ」の火を消すことにならないように、私たちは努力しなくてはならない。



国立映画アーカイブ相模原フィルム収蔵庫にて、2012年10月



最後まで現役を貫いた人生 名誉会員 水越 武

93歳で田沼武能さんがお亡くなりになった。6月1日に逝去されたが、前日まで全日写連の会報の原稿に不備がないか、電話でやりとりがあったとのこと、まさによく話されていた「生涯現役」の見事な人生であった。80歳を超えると何かと歳を気にかけてりするが、自分より10歳年長の田沼さんがお元気で仕事をされている、その存在にどれほど励まされ勇気をいただいたことか知れない。

追悼文を書くにあたって、いただいた『わが心の残像』（文芸春秋、1991年）を取り出して目を通し始めたら、時間を忘れ一気に読み通してしまった。各分野の第一人者や長老110人の肖像写真と、撮影時の印象

と人となりが見えられている。作家、学者、アーティストが多く、政治家、社長、アスリートが皆無なのは田沼さんの好みか、あるいは時代によるものだろうか。初めて拝見した時よりも今回は丹念に見たためか、数倍印象深く見せていただいた。これは30年という決して短くない時の流れに、この著作が成長を遂げたのか、それとも私が様々な経験を積むことで深く理解できるようになったのだろうか。岡潔を語った章では、以前に岡潔の本を2、3冊読んでいた私は、交友関係などいろいろと想像を巡らしながら目を通して短編小説のような味わいを感じた。

「わが心の残像」に取り上げられた知識人110人の方はそれぞれ個性的で立派な仕事をされ、ほとんどの方が文化勲章などを受章されている。田沼武能さんも今は黄泉の地でこの人たちの仲間になられているに違いない。畏敬の念を込め、私の追悼文としたい。

【賛助会員からの寄稿】

田沼武能先生を偲んで

株式会社アイデム コーポレート機構統括部 望月彩子

田沼武能先生がご逝去されたと知った6月2日、私は大阪で写真コンテストの作品展を設営しており、手が震えたのを覚えています。田沼先生には子どもを対象としたコンテストで16年にわたり選考委員長をしていただきました。1点1点真剣に向き合って審査をしていただき、表彰式ではいつも子ども達に温かなメッセージを贈ってくださいました。ギャラリー「シリウス」では田沼先生と仲間たちの写真展を定期的に開催、コロナ前まで開催していたパーティーでは沢山の笑顔で溢れていました。どなたにも変わらず接してくださるそのお人柄、いつお会いしても情熱をもって撮影を楽しんでいらっしゃる姿、写真界のために尽力を惜しまない姿勢、年齢は存じ上げていましたが、いつまでもお元気でいらっしゃる信じていました。偉大な生涯写真家の先生を失い心が悼むばかりです。心よりご冥福をお祈りします。合掌

田沼武能先生を偲んで

エプソン販売株式会社 代表取締役社長 鈴木文徳

田沼先生とはエプソンのフォトコンテストの審査員をはじめ、20年以上のお付き合いとなります。

コンテストの審査会においては、応募された作品をじっくりかつ丁寧に、時にはこやかに、時には厳しく審査されていました。そして表彰式においては、入賞者の皆さんと作品について楽しそうに語られていたことを思い出します。作品はもとより、誰とでも同じように、優しく接して下さった田沼先生の人柄のすばらしさに何より感激しました。

エプソンのフォトコンテストの礎を築いていただい

ただけではなく、写真ファンとエプソンを繋いでいた田沼先生に感謝申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

田沼武能名誉会長を偲ぶ

OM デジタルソリューションズ株式会社

代表取締役兼 CEO 杉本繁実

田沼武能様のご逝去の報に接し、在し日のお姿を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。貴協会の会長職をはじめとして、関係団体の要職を歴任され、写真文化の向上、写真家の地位の向上、写愛好家の指導に尽くされたこと。数多くの作品を通して、その時代時代を克明に写し出されたこと。何より等身大の子どもの笑顔の作品が多くの方に感動と安らぎをもたらされたことを改めて思い起こしております。

写真、カメラ業界に携わるもののひとりとして、万感の思いを込めて感謝を申し上げ、心から哀悼の意を捧げます。

田沼武能先生の思い出

株式会社キタムラ ファウンダー・名誉会長 北村正志

お目にかかる前から『世界の子どもたち』という写真集を拝見し、先生の眼差しを感じておりました。

カメラのキタムラではフォトコンテストに力を入れており、先生に長年にわたり審査員やNPO フォトカルチャー倶楽部の顧問をお願いしておりました。お目にかかるたびに「写真保存センター」の重要性を話されていたことを思い出します。

2020年の帝国ホテルの文化勲章祝賀会の華やかなパーティーで、奥様とともに元気で嬉しそうになされていた顔を今でも思い出します。年齢の離れた私にも同齢のような話し方をされるお人柄でした。

田沼先生のロケで教えていただいた事

キャンノンマーケティングジャパン株式会社

プロフェッショナルフォトサポート部 部長 中村真一

田沼先生との数ある思い出の中で最も印象深いのは、TV番組「写真家たちの日本紀行」のロケ現場です。これは写真家の撮影現場に立ち会える貴重な機会であり、私のその後の考え方に大きく影響を与えました。

田沼先生の放映回は2010年でした。改めて当時のメモを見返すと、田沼先生のお考えがありありと甦ってきます。

「いつ行っても撮れる観光地的な写真はつまらない。偶然の重なりで美しさは倍加する」「子どもは社会の鏡。子どもを撮ることでその国のバックボーンが見えてくる」「自然と人間の共生が大きなテーマ。自然の森を通して人との繋がりが見えてくる」

子どもや森を撮っているようで、実は社会そのものを切り取っていた田沼先生。うわべだけに捉われず物

事の本質を求めるお姿をお手本に、私も精進してまいります。田沼先生、今まで本当にありがとうございました。

編集者視点を持った写真家に頭の下がる思い

株式会社ワン・パブリッシング

CAPA編集長 菅原隆治

毎日新聞社の一室、うず高く積まれた書類の壁と暗室の間を半身になって通り抜けると、その奥の小さなソファに腰掛ける柔らかな笑顔。それが初めて対面で田沼先生とお会いしたときだった。木村伊兵衛の特集はその場で構成が決まり、当時のお話は尽きないため取材メモは何枚にも及んだ。ただ、記事をイメージしてお話しされるのでメモをまとめやすく、お話の要点は力が込めるからキーワードがそのままタイトルになる。まだ若造だった私の気持ちに優しく寄り添ってくださるインタビューはとてもありがたく、頭の下がる思いであった。それ以来、機会を見ては小誌の企画にお付き合いいただいたが、最近では対談記事に出演され楽しいエピソードやカメラのお話をたくさん語っていただいた。あの笑顔と機微に聡いユニークなお話にもう触れることがないと思うととても寂しい。天上から見る此岸はどうですか。どうか安らかに。

挑戦したい

清里フォトアートミュージアム

事務長 小川直美

「ヒヨコ同然の私の写真など、買ってくれるところはない。すべて勉強と、自分で自分をなぐさめては被写体に向かっていた。」仕事を掛け持ちして買ったライカを手を下町でシャッターを切る青春時代を過ごされた田沼先生に、当館は、35歳以下対象の公募「ヤング・ポートフォリオ (YP)」の2002年度選考委員をお願いしました。

「YPは若い写真家を奮い立たせる要素になっているんじゃないかな。そういう目標があることは人生にとって素晴らしいこと。私はもう全く権利がなくなっちゃってますけど、若かったら挑戦したいですね(笑)。」若わかしい気持ちのまま旅立たれた田沼先生の、これは73歳当時の本音だったと思います。謹んで哀悼の意を表します。

田沼先生の事務所に伺った思い出

株式会社ケンコー・トキナー 広報・宣伝課 田原栄一

田沼先生との思い出といえば、2015年のケンコー・トキナー新社屋披露にJPS会長としてお越しいただいたことです。2階のショップが仮オープンということで、膝サポーターを購入いただいたのですが、後日、田沼先生から「サイズが大きすぎる」と電話があり、一回り小さいサイズのものと交換することに。クレームで訪問なのですが、先生の事務所を訪問できるということで、内心ワクワクしていました。その時、お伺いしたお話では、フィルム時代のフィルムよりも、デジタルのHDDの方が、置き場所が多く占めているとのことでした。いつの日か、先生の撮影された写真で

先生をしのぶ写真展ができればと思います。

田沼武能先生のご逝去を悼む

株式会社シグマ 代表取締役社長 山木和人

長年にわたり、日本写真文化の発展に多大な貢献をされてきた田沼武能先生を失ったことは痛恨の極みです。日本を代表する写真家としてフロントラインに立ち、写真文化の新しい可能性を常に切り拓いていらった一方、日本写真家協会会長として長年にわたって日本写真業界の維持・発展、若手写真家の育成に心血を注がれたその功績は誰もが認めるところであり、私たちにとっては道標ともいえるべき存在でした。

先生のあの明るい笑顔と大きな声で勇気づけられた方がどれだけ多くいたことでしょうか。先生、本当にありがとうございました。どうか安らかに眠りくださいませ。

写真家の凄さを見せてくれた人

株式会社写真弘社 代表取締役社長 柳澤卓司

田沼写真の裏方として 50 年余、常に本音で語る先生から写真のことだけでなく、人生の多くを学ばせていただきました。私の記憶では田沼先生と初めてお会いしたのは、私が未だ高校生の際だと思っています。学校の帰りに父親の会社に立ち寄り写真整理やお使いをしました。その日は2人の来客があり、木村伊兵衛先生は時どき父親のお使いでお宅に伺っていましたので分かりましたが、連れの若い方は初めての方でした。木村先生と父親が歓談している合間に彼を「たぬちゃん、たぬちゃん」と声をかけていたのが印象的でした。その後 10 年以上、全くお会いする機会がなく過ぎました。私が 30 歳を過ぎて父親の会社に入社することになり、初めて担当した写真家が田沼先生でした。

田沼写真の真髄は、私と年齢差が 10 年以上の先輩でありながら仕事上では常に対等に発言せよ、とのことでしたから、時には大声で自論を戦わせることもありました。気がつくといつも先生の叱咤激励の本心は、常に弟を諭すような口調であったことを思い出します。私は写真家の凄さを田沼先生に見た思いが致します。本当に長い間お世話になりました。感謝。

写真業界での功績を称えて

株式会社タムロン 代表取締役社長 鯉坂司郎

田沼武能先生のご逝去を悼み、心からお悔やみ申しあげます。田沼先生は文化人や世界の子どもたちを多く撮影された素晴らしい写真家である一方、日本写真家協会会長、日本写真著作権協会会長、日本写真保存センター代表などを歴任され、長年写真家の地位向上にご尽力されました。その功績が認められ、2019 年には写真家として初めて文化勲章を受章されています。弊社は JPS 企画展『生きる』の協賛を機に、親交を深め

させて頂きました。ご生前のご功績を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

新製品発表会の思い出

株式会社ニコンイメージングジャパン 執行役員

カスタマーリレーションズ本部副本部長 森 真次

田沼先生から沢山の思い出をいただきました。写真家にとって写真そのものが全てであるように、カメラメーカーにとって世に送り出すカメラが全てです。今でも忘れない 2007 年秋新製品発表会にわざわざ先生にお越しいただいた際、我われに「おめでとうございます」との言葉をかけていただきました。そのさりげない祝辞の中に「復活出来てよかったね」という温かい思いがひしひしと伝わってきました。その頃のニコンは描写性能がなかなか上がらず、プロカメラマンの皆さまから叱咤激励の言葉を多数いただいていた。ニコンはフルサイズデジタルカメラを出せないままでいわれましたが、その噂を撥ね付けるように発表したのです。その時以来私は先生から多くの励ましやお叱りをいただきました。感謝は尽きません。

国内外での功績を称えて

株式会社ピーピーエス通信社

代表取締役社長 ロバート・L・カーシンバウム

田沼武能さんは、戦後日本の写真界をリードし、国内外で活動を行った重要な写真家として記憶されるでしょう。

Tanuma-san will be remembered as a significant leader in post-war Japanese photography, working in an environment that involved both domestic and international worlds.

Robert L. Kirschenbaum
President
Pacific Press Service

田沼武能先生を偲んで

富士フイルムイメージングシステムズ株式会社

代表取締役社長 松本考司

田沼武能先生は、時代を記録するドキュメント写真家として第一線で活躍された一方で、写真家の著作権を確立するためにご尽力されるなど、写真業界の発展にも多大なるご功績を残されました。

私ども田沼先生には、長い年月に渡り、様々なご協力やご指導を賜り、時には厳しいお言葉をいただきながらも写真文化発展に向け田沼先生と共に過ごせたことは、大変貴重な経験となりました。改めて深く感謝申し上げます。2022 年 6 月 1 日、奇しくも「写真の日」に天に召されました田沼先生。田沼先生のご遺業を継ぐべく、残された私どもで精一杯、写真業界の向上に尽力して参りますので、願わくば、末永く私どもの行く手をお見守り

ください。ご冥福をお祈り申し上げます。

田沼武能先生をお偲び申し上げます…

株式会社フレイムマン 代表取締役社長 奈須田一志

田沼武能先生の悲報を知り、未だに信じられない思いで一杯です。SNSで訃報を目にして手が震えました。ある方にお電話でお聞きして間違いのないことを確認して愕然としました。一気に身体から力が抜けて、暫く放心状態だったかと思います。奥様、ご家族の皆様もどれ程お辛いことでしょう。お身体にはどうかお気を付けて下さいませ。田沼先生とお目にかかる予定がございまして、少し前にお電話でお話をして「少し体調が悪いからちょっと待っていてくれ～」と…これがまさかの最後の会話になってしまいました。

私のような若輩者に、時には厳しくご指導を下さり、普段は暖かい口調で冗談を交えてからかって下さいました。例えば新型コロナ禍の中、某ギャラリーでお目にかかった際には、第一声が「お前さんはマスクなんかしなくともコロナが逃げて行っちゃうよ！」と（笑）いつも「おう…」の後に必ずジョークを添えてお話をして下さいました。

常に仰っておられました生涯現役を貫き通されましたが、もっとお元気でいて下さると信じていました。たくさんのお言葉に励まされました。

田沼武能先生…本当に有難うございました。

お疲れさまでございました。少しごゆっくりされて、ご家族そして写真業界を見守っていて下さい。

衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

心の財産となった先生のお言葉

株式会社堀内カラー 取締役社長 吉本高久

田沼先生には、カラープリントが一般的になってきた時代からお世話になり、ポジフィルムをデュープする際など、その色味や味わいについて、熱心にご指導いただいたと聞いております。また2015年、「日本写真家協会賞」をいただいた際のお言葉を決して忘れることはありません。弊社前社長が「今後も裏方として写真業界の発展に努めて参ります」と申したところ、田沼先生は「貴方たちは裏方ではなく、パートナーです」といつて下さいました。この言葉にどれだけ励まされたことでしょうか。写真家だけでなく、関係業者、協会と写真業界全体を発展へと導かれた田沼先生。そのご功勞に敬意を表し、心より哀悼の意を捧げます。

田沼先生 ありがとうございます

株式会社山田商会 取締役社長 志村哲文

写真関係者の集まりの中には、いつも笑顔の先生の姿がありました。そして、いつもご愛用の撮影機材を収めた大きな重いバッグを携えておられました。そして、いつも「座っていても写真は撮れない。」という

続けておられました。こうして先生は私達に全身で「写真とは」を教えてくださいました。

先生の写真に対する執念と並外れたエネルギーを受け継ぎ、写真業界の更なる活性化に向けて一汗二汗三汗をかいて、先生の長年にわたるご尽力、ご苦勞に少しでも報いてまいりたいと存じます。

田沼先生ありがとうございました。安らかにお眠みください。

田沼武能氏を偲ぶ <京都での思い出>

ライカカメラジャパン株式会社

代表取締役社長 福家一哲

田沼先生には何度かお目にかかる機会がありましたが、ゆっくりお話を伺うことができたのは、弊社ライカギャラリー京都にて、個展「戦後を生きた子ども達」を開催いただいた時でした。とても柔和なお顔とお話し方、そしてお話の内容はユーモアと機知に溢れ、トークショーも掛け合い漫才のように面白く、会場の空気をひとつにされていました。

偉大な写真家であり、お仕事には大変厳しい方と伺っていましたが、とても優しいお人柄で、常に周りの方がたに気配りを欠かさない方でした。

もうお目にかかれないのはとても残念ですが、雲の上から写真、カメラに関わる我々のことを微笑んで見守って下さってらっしゃると感じています。大変お世話になり誠に有難うございました。

田沼武能氏を偲ぶ 「夏の日のおしぼり」

ライカカメラジャパン株式会社

Marketing 米山和久

写真展のご相談などで何度か田沼武能さんのご自宅にお邪魔したことがあります。田沼さんはたかが一会社員の私にも気をつかっていただきました。おしぼりが…。暑い夏の日のおしぼりほど嬉しいものはありません。しかも田沼さんが自ら入れてくださったお茶とお菓子。恐縮しながらも美味しくいただきました。

仕事には厳しく、その昔、写真専門誌のテストレポートでは歯に衣着せぬ評価で厳しいお言葉をいただいたこともありました。しかしながら、世界の子どもの写真を観ていると、本当に優しい心をお持ちの方なのだと思いつく感じがします。その優しさ、そしておしぼり、私は決して忘れることはないでしょう。

初めてお会いしてから30年以上の長い間、本当に色々とお世話になりました。

(構成／出版広報委員会、常務理事・小池良幸)